

最優秀賞（一般部門） 見澤ゆみ「ペンネーム」

心の危機

週三日。四時間の透析とうせきを受けに行く。腎不全じんふぜんの父の日課だ。こんなことがかれこれ十年続く。しかし当初は苦難の連続。厳しい食事制限に加え、長時間に及ぶ透析は心まで縛り付けられるよう。

「やりたくない。行きたくない」朝になると父は必ず渋った。「透析をしないと死んじゃうよ」と言えば「それなら死んだ方がマシだ」と声を荒らげる。親子げんかも絶えなかった。

しかし透析開始から一ヶ月が経つ頃。病院から父が来ていないと連絡があった。まさかとどうしてが入り交じる。慌てて父を病院に連れて行くと、案の定、身体には水が溜まっていた。「田中さん。針を刺していきますよお」「もうやんなくていいんだよ！俺は死にてえんだよ。もうやめろよ」血管に穿刺せんししようとするも落ち着かない父。身体を左右にひねり、ただをこねる。これではまるで注射を嫌がる

子どものように。すると臨床工学技士りんしょうこうがくぎしさんは針を置き、たつたひと言。「一緒にいますから一緒に頑張りましょう」と言った。その眼差しがどうしようもなくやさしくて。さっきまでつり上がっていた父の目尻にうっすら光るものが見えた。この日臨床工学技士さんはしばらく父の手を握ってくれた。時に「大丈夫ですか」と声をかけ、時に「大丈夫ですよ」と励ましながら。そんなやさしさが沁みたのだろう。父も最後は「こんな身体だけどまだ生きてえなあ」と呟いた。

あれから十年。今日も手を握られ透析を受ける父。最近 は透析だけでなく、運動にも励む。そこに臨床工学技士さんたちの存在があったことは間違いない。彼らのおかげで父は生きることに意欲的になった。

まさに臨床工学士は機器を使うだけじゃなく、心の危機も救ってくれる仕事。これからも感謝の気持ちを忘れず、一緒に父を支えていきたい。

